

## 今月のテーマ

### 相模原殺傷事件

2016年7月26日未明、神奈川県相模原市にある障害者施設で、殺傷事件がありました。入所者19人の死亡が確認され、27人が重軽傷を負いました。この事件について、当事者・保護者・施設などの立場から思いを寄せてもらいました。

#### ■優生思想を懸念

全障研全国委員長 荒川 智

この事件は怒り、悲しみと同時に、何ともやりきれない、また複雑な思いを生じさせます。私は全国大会の挨拶で、「どんなに障害が重くても、かけがいのない命は決して奪われてはならない」「加害者が語ったとされる『障害者はいらぬ』『安楽死させるべきだ』といった理屈は決して正当化されるべきではない」と述べました。人権思想と発達保障の理念を真正面から否定する言動を、許すことはできません。

同時に、加害者がかつては教員志望で周囲の評価も悪くなくかつたという情報は、教員養成に携わ

る事件で思い起こしたのは考えすぎでしょうか。

事件後、国や自治体から出てくる対策は、施設の防犯対策や精神障害者の措置入院のあり方など、対症療法や取り締まる方向が目立ちます。容疑者も社会のなかでは弱い立場で、弱い者がより弱い者を攻撃しました。格差が広がり、弱肉強食が正当化される社会こそ変えていかないと、弱い者を排除する風潮はなくなりません。どんなのちもかけがえない存在であることを体現する施策こそ大切だと思います。

#### ■障害は迷惑じゃない

WEBマガジン・福祉広場編集長

井上吉郎

1948年に制定された優生保護法は、「優生上の見地から不良な子孫の出生を防止するとともに、母性の生命健康を保護することを目的とする」と第1条で謳い、「不良な子孫の出生を防止する」ための優生手術などを規定していた。この法律は、20年前の1996年に廃止されたが、「優生思想」にもつづいた法律が存在し

しておきたいのは、優生思想はナチス固有の論理ではなく、非常に根深いものがあるということです。歴史的には、障害児・者が増えれば社会にとって「負担」「重荷」となるので、これ以上増えないように、生まれないようにという主張は、1960年代くらいまで様々な立場の人からいろいろな文脈でなされてきました。人権思想の広がりや表向きは克服されてきたかのように思われますが、今日、社会保障費の膨張と財政困難が吹聴されるなかで、再び頭をもたげてきた感があります。昨年の茨城県教育委員の障害児の出席数を減らせないか？という発言が思い出されるでしょう。

障害の社会モデルに従えば、障害はその人の機能障害と環境（社会的障壁）の相互作用によって生じます。社会は障害の一因であるのなら、障害のある人を包摂（インクルード）し、しっかりと支えるのは社会の義務なのです。障害者を排除する社会は、様々なマイノリティや周縁に置かれた人にも攻撃のターゲットを広げるでしょう。インクルーシブな社会を実現するためには、障害のある人などを「負担」とみなす考え方と、本音でしっかりと対峙していく必要

があると、切実に思います。

#### ■取り締まりの強化ではなくいのちを大切にす施策を

大阪障害児 者を守る会 播本裕子  
津久井やまゆり園で被害にあわれた方々は、どんなに怖かっただろう、痛かっただろう、助けを求めていただろうと思うと胸が張り裂けそうです。そして、「19名の知的障害者」で一括りの報道は、障害のある人が真に独立した市民として日ごろから生きていける社会ではなかったのだとあらためて感じています。名前を明らかにすることで、被害者がパッシングを受けかねない社会、日本は今そんなにもい社会なのだと思います。得ません。

この事件をきっかけに障害者の家族は手元で看るのが一番という思いが強くなる一方、国はそれをうまく利用して、ますます介護の家族責任を強化していくのではと心配です。また、一部の障害は出生前の検査でわかるようになり、中絶されることも多いと聞いています。科学が障害者を生きやすくするのではなく、一歩間違えばヒトラーの考えに近づくことに手を貸してしまう恐れがあることをこ

ていたのである。少なくとも20年前までは、国会を含めて国民の多数は、「優生上の見地から不良な子孫の出生を防止する」の規定を是としてきたことだろう。

事件の背後には、障害者自立支援法を貫く考えがあるだろう。「障害自己責任論」を押しつけ、「自己負担」を求める考えは、「役に立つ」ことを求め、「社会に迷惑をかけない」存在を前提にしている。犯行は戦後史を画するような悪質なものにも関わらず、蛮行を糾弾し、犠牲者を悼み、国民に困難を乗り越えろと呼びかける総理大臣の言明はなかった。さらにいうなら、障害者組織から声明が出されているが、「非障害者団体」からのそれはない。事件が社会のありようにかかわり、社会が暴力で破壊されたにもかかわらず、だ。

「ある社会がその構成員のいくらかの人々を締め出すような場合、それは弱くもろい社会である」(1979年の国連国際障害者年行動計画)。

#### ■脅威を取り除く役割を

みめま福祉会理事長 高橋孝雄

職員はこの事件を通して大変に

心を痛めています。他人事ではなく、夜勤が怖く不安になると語る職員がいます。施設では、門扉やセンサーライトの設置などの議論も始まっています。本質的な問題でないと感じながらもこの方向での議論も進めないわけにはいきません。

この事件は、多くの施設入所者、家族、職員に筆舌に尽くしがたい衝撃を与えました。障害者の命を「いらぬ命」として抹殺の対象にした事件は特異なものであっても、福祉現場や社会のなかにも、このような考えが少なからずあり、しかも広がっているという実感があります。

制度では、障害者自立支援法から始まった応益負担の考えや、生活保護の3年連続の引き下げなど、福祉の対象が社会の負担、迷惑になっていくという考えの助長です。

「社会の負担になっている」と言われている実感の対象は、目の前で暮らしている仲間たちであり、彼らにとって、その感情はリアルな脅威になります。私たちには、この脅威を取り除く役割があります。人間の命がかけがえなく大事であることを示す実践を進めることが必要です。

### 障害者施設 19人殺害



▲事件を報じる各紙。全国に衝撃が広がった。